田八隻、原町臺町二十四隻、丸森百二十八隻、沼上十隻、五十澤六隻、梁川六隻、福島八隻（外三隻は客船）あり等と云ふものが有るが、その時期・數の正否は未詳である。然し港勢の比較には概略利用出來る。

これ等の船は總べて貨物船である。

註一　宮下喜佐治　瀬上鄉土教本　一四頁

註二　上流部船路の船頭だつた老翁の話に依る。

註三　長井政太郎　最上川の水運及び輸送物資に就きて。地理學評論六ノ一〇　三三頁

註四　阿武隈川上川船區では船頭一人、舟子二人が乘組員で船頭は船中に殘り棍をとつた。全川上流部では船頭一人舟子一人であつた。此の相異は後に記述す。阿賀川では五人位乘組んでゐたと云ふ。三、四人かかりで曳き上げたのである。

註五　明治十二年福島縣統計、明治十三年福島縣統計　此の外の縣統計には河岸別船數の記載なし。

（未完）

新著紹介

○歐亞點描　下田將美著　一元社發行　定價二圓八十錢

著者下田氏は大阪毎日の經濟部長として有名な方であるが昭和九年の春から夏にかけて歐亞各地を巡遊され、比律賓・セレベス・ジャバ・印度からイラク・シリアをへて土耳古に入り、バルカン諸邦を訪問して歐洲に出たところの世界新市場視察團の東道をされたときの土産話である。勿論本書はさうした經濟事情の研究を專門的に書いたのではなく、東邦の遊士がいかにその遍歷した所に旅愁を感じたかといふ一篇の美文讀本である。從つて地理書ではないけれども、かうした感慨にみちた旅行記は筆者まだ嘗て讀んだことがない。セイロンにしても、ペルシヤ灣にしてもイラクの沙漠の旅にしても、トルコでの追憶にしても、卷中いづこをみても、全くフレッシュな感じで珍らしく、さうして深く考へさせらるゝ地誌であるとの感にうたれる。集むる所は、夕闇のバルカン、古都バグダツト、コロンボのフエルナンド君、賭博のジヤワ、A老人の家庭、白と赤、マニラの牢獄、珍魚デオロギー、苦熱のペルシヤ灣、シリア沙漠を横切る、土耳古雜信、沈默の塔ナチス淸黨事件直後の伯林、シヤガタラ文の舊港、世界的二選手を偲ぶ、鰐を喰ふ、三百年前の日本地圖、ダマスクへ、密輸入物語、窮極を思ふ。といふ二十篇、いづれもアトラク

チーブな標題であるが、内容はこの標題に勝さつて、教訓的であり、舒情的であり、詩もあれば散文もある。全く讀むものをして恍惚描く能はざらしむるもの、實に才筆といふべきであらう。筆者はかうしたものを讀んで、然る後地誌を語るべきであることを多くの地理科の教員諸君に傳へたい。地理の教員は現に動きつゝある生きた世界を紹介すべき任務をもつからである。（藤田）

○支那の農業と工業

浦松佐美太郎　牛嶋友彦譯　岩波書店發行　一圓八十錢

原著はロンドン大學教授トーネイ教授が昭和六年に太平洋問題調査會に提出したものである。支那の歴史に通じたといはるゝ外國人が、いかに支那の社會を理解するに困難であるかをしめす十分な良著である。支那の社會は容易に門外漢にはわからないものだといふ事を教へられる丈けでも本書は譯述された價値がある。支那はどうするか、どうすればよいのか、筆者は本書を得て卷を終つて更らに大空に向つて再びこの言を發した。王道樂土の滿洲の出現を見た後に本書の求むる所は或は解決されるであらう。（藤田）

○信州寒天誌

池内精一郎著　信濃寒心太水産組合

長野縣には地誌の熱心家が多い。これもその一つで諏訪高等女學校の池内精一郎氏が寒天の組合から委囑をうけて編纂されたもので、寒天の發明、丹波？から傳へた信州寒天の地原及び、現在に至る迄の發達をのべ、併せて山梨縣大武川の寒天業、伊谷草による樺太寒天等の發展を語り關西では大阪・京都・兵庫にわたる丹波高原に存する寒天業をのべてあるから、日本の寒天に關する地誌はまとまつた形である。猶寒天の輸出狀況及其用途に及ぶ、最後に寒天に關する文獻目錄がのつてゐる。非賣品とあるが申込によつて實費でわけて貰へると考へる。（藤田）

○日本北アルプス地方地圖　同　說明書附

信濃北安曇教育部會　定價六十錢

長野縣北安曇郡地方地圖を東京の小林又七で印刷して出版北アルプス旅行の栞とし、極めて親切な說明書がついてゐる村落・市街・交通路・山小屋・社寺等細大洩さず、帝國圖二十萬分一のやうな着色であるが十二萬五千分一であるだけに更らに詳密であり教へらるゝ所が多い。六十錢は廉い。（藤田）

雜報

○ガルフコーストの石油

ガルフコーストとは米國ルイジヤナ州東境よりメキシコ灣に沿ひて西にのび同州南部からテキサス州西南部リオ・グランデリヴアに及ぶ、メキシコ灣岸七百哩のことで、其幅は七十五哩乃至百哩に亘る地域である、元來地質時代にはメキシコ灣海底であつたが、海水が減